

新・俺と蛙^{カワズ}さんの
異世界放浪記

4

くす
もち

主な登場人物

メイちゃん

冥界で出会った
謎の女の子。
勝ち気な
ツンデレ美少女。

天女姉

天女さんの姉。
凛々しく、美しい。

天女さん

神界のフルキューレ。
スケさんの宝を狙う。

スケさん

竜族の青年。
女の子に目がなく、
スケベである。

カクさん

神族の戦闘狂。
全体的に角ばっている。

カワズさん

自身の命と引き換えに太郎を
召喚した魔法使い(500歳)。
太郎によってカエルの姿で
蘇生させられる。

こうのたろう 紅野太郎

本作の主人公。カワズさんによつて異世界へと召喚された。
魔力は800万1000。

トンボ

妖精郷に住む下っ端妖精。
小さいが態度はデカイ。

「祭りです」

俺、紅野太郎は妖精郷の我が家でそう宣言した。

「は？ なんじゃそれ？」

それを聞いた大きな蛙の魔法使い、カワズさんは意味が分からないと目で訴えてくる。そんなカワズさんの反応を見て、俺は簡単な説明を加えた。

「ほら、例のアイドルのいる村でお祭りをやるんだよ。収穫祭」

「ほうほう。果物かのう？ 野菜かのう？ そりゃ結構なことじゃな。楽しんでこい」
思ったよりもずっと淡泊なカワズさんの答えに驚く。

「あれ？ カワズさんはお祭りに興味はない？」

カワズさんは少し考え込んでいたようだったが、答えは芳しくなかった。

「ふむ、特にないな」

興味がないというのなら仕方がない。無理して参加するなどお祭りに対して失礼である。

だがカワズさんの興味を引けなかったのが残念なことに変わりはないので、俺は肩を落とした。

「そいつは残念だ。カワズさんの知り合いも来るからどうかな、と思ったんだけど」

「わしの知り合い？ 誰じゃよ？」

祭りには関心がなくとも、参加者には興味があるらしい。気が変わるかもしれないし、せっくなので珍しい参加者を伝えることにした。

「沼地の魔女さんだよ」

今回顔を出す彼女は沼地に住むカワズさんの知り合いであり、俺は魔女さんと呼んでいた。

一見、赤毛の幼い少女。その正体は、カワズさんと同世代の魔法使いである。

カワズさんに勝るとも劣らない魔法の知識と技で、自らの肉体を愛くるしい少女の姿に保ち続ける、まさに魔女というあだ名がぴったりのお方である。

どうやら、カワズさんは魔女さんが祭りに来るのが信じられないようだった。

「はあ？ あいつが祭りに参加するのか？ 山奥の村の祭りにわざわざ？ 嘘じゃろ」

「ホントだよ。ネットの告知を見て、興味を持ったらしい」

俺はカワズさんを誘うにあたって用意しておいた告知用のチラシを見せる。

可愛らしい少女の写真が盛り込まれていたそれを見た瞬間、カワズさんは何かを悟ったようだった。

「あーあ。なるほど。こりゃあ、あいつ好みじゃな」

「まあ、そういうわけなんだ。当然、少女Bファンクラブも祭りに来るだろう。アドバイザーとし

てマオちゃんと女王様も、サブライズで参加予定だ」

少女Bファンクラブ会員のシングルナンバーが揃い踏みとなれば、祭りも大いに盛り上がるだろうし、カワズさんも祭りに興味を持つかもと考えていた。

しかし俺が名前を上げる度に、カワズさんの眉間に深いシワが刻まれていく。

その結果、カワズさんは妙な結論に至ったようだ。

「……おいおい。それ、本当に祭りか？ なんか暗黒魔界のサバトとかじゃないのか？」

「ハッハッハ。どこだよ暗黒魔界って？ カワズさんも面白いことを言うなあ」

「タローや。お前さんもいい加減、自分がいかに面白い状況の中におるのかを客観的に見るようになればいいんじゃないかな。そして震えるがいい」

「祭りの準備で忙しいから、今の時点ですでに震えているけどね。今回は屋台にも力を入れる予定なんだ。地球の夜の定番と、女の子に大人気のスイーツ屋台でもてなしの予定だぞ！ 女性参加者も大いに期待しているとも！」

「それはええのう。どれ。わしも食うてやろう。甘いもんは好きじゃぞ？」

「ああいいとも！ 今日の俺は気前がいい。なんたつて祭りだからな！ 夜には村の男衆による特別バトル公演もあるから、バトルが好きなカワズさんもきっと楽しめるぞ！」

「バトル公演？ ……あー、なんか聞いたな、誰でもかつこよく戦えるつちゅう面白魔法か」

お祭りを盛り上げるには、しっかりとした準備が必要なのは言うまでもないが、それもお祭りの

醍醐味だいごみの一つ。みんなで計画を立てて、一つのイベントをやり遂げるのは素敵なことだ。

しかし、こんなにも楽しい催しもよおの裏で、俺の知らないうちに、どす黒い計画が密かに進められていたのだった。



その暗殺者は、『死神』と呼ばれていた。

黒いコートとぼさぼさの黒髪が死神を連想させるのが、その名の由来である。

そんな彼は今、住むことはおろか歩くことだけでも落ち着かない、きんきらきんで馬鹿でかい屋敷の一角にいる。

屋敷の主人の派手好きが窺える無駄に豪華な装飾の数々は、そうしたものに興味のない死神でも分かるくらい、統一感がなかった。

はっきり言えば、趣味が合わないの一言。そんな主人に彼が雇われている理由は単純なもので、金払いがいいからであった。

死神は主人の部屋に向き、扉を開く。

部屋の奥には、恰幅かつらみのいい中年の男が小さな椅子にでっぷりと座っていた。

「よく来たな、死神」

高そうなバスローブが、主人の大きな体をすっぽりと包みこんでいる。

主人の体型は、まるでハムのようなようだ。そんな彼の手元にワインのツマミとしてハムが置いてあるのを見つけ、これはちょっととした笑いどころだと、死神はこっそり思った。

「これはこれは。どうも御主人様、ご機嫌はいかがかな？」

死神がそう言いつつ深々とお辞儀をすると、主人は鼻を鳴らして応じる。

「ふん。悪くもないがよくもない」

ワインを苛立いらだたしげに呷あおると、主人は荒々しくグラスを机に叩きつける。

そして、つまらなそうにグラスにワインを注ぎ足した。

「今日、来てもらったのは私用でな。報酬ほうしゅうはいつもの二倍出そう」

「そいつはまた景気のいい話だ……どいつかを殺して来いと言うなら、俺とあんたの仲だ。通常料金で手を打つが？」

死神にとって、これはいつものビジネスである。

親切心から死神がそう告げると、主人は大きな体を揺らしつつ首を横に振る。

「……いや。今回はそれ相応の手間がかかるだろうからな。やはり、二倍でよろうよ」

「そうか。なら、さっさと用件を言ってもらおうか？」

「ああ、お前といつまでも話しているのは具合が悪い。なに簡単なことだ。ある村から、一人の娘

を連れて来てくれればよい」

「……」

主人のどことなくいやらしい目つきに死神はピンときたが、依頼主の趣味にいちいち口を出す気はなかった。

「なるほどね……。少しばかり強引な手段になることは分かっているよな？」

「いやいや誤解するな。お前のやり方でよいということだよ。わしは何も言わんさ」

「はっは！　なら好きにやらせてもらうぜ？」

「ああ。だが、ほどほどにすることだ。お前が致命的なミスをすれば、わしとて危う……」

そう言いかけた主人に、死神はハッと笑い飛ばし、踵を返した。

主人がため息をつく、死神はそれに応じるように呟く。

「ミス？　……そんなことはないね。目撃者なんて誰も残りはいないさ。死神の鎌は誰の目にも留まらない」

そして、ガチャリと扉を開けようとした刹那、雇い主に視線を向ける。

「あんたもそれを忘れないことだ」

次の瞬間、キンと甲高い音がしてグラスが輪切りになり、主人の短い悲鳴が聞こえてきた。

死神は部屋から出ると、使用人から渡された羊皮紙に目を通す。

依頼内容を確認した彼は、雇い主の趣味が理解出来ず、頭を捻っていた。

「まったく……あのエロジジイが。どうしようもねえな」

今回のターゲットはある娘……かなり幼い。

彼にとってはどうでもいいことだが、噂になるほどだから相当美しいのだろう。

「……籠にでも入れて歌わせるのかね？　理解に苦しむ」

さらに報告によれば、娘の住んでいる村では収穫祭が行われるらしく、その時を決行日として指定されている。祭りが始まれば村人の気も緩むし、誘拐するには悪くないと死神は考えた。

「まあ、俺は誰かを斬ればそれでいいが……手応えがありゃいいが」

死神はそう呟くと、読み終わった紙に魔法で火をつける。

その赤い炎の中で燃え散った書面に書かれていたものは、少女の特徴と呼び名だった。

——『歌姫』。

年端もいかない少女のあだ名にしては、随分と大げさなもの。

そんな名前が付けられたせいで起こる悲劇に思いを馳せて、死神はほんの一時だけ憐れんだ。

屋敷の外に出た直後、死神は自分が刺客に囲まれていることに気づいた。

「待て……死神だな」

「ああ、そう呼ばれてはいるな。あんまり気に入らないがね」

わざわざ、死神に声をかけてきた刺客は十人。全員が同じような黒装束を着ている。

死神が視線を向けると、刺客達は一回り大きくなり、犬のような牙と爪が剥き出しになった。恐らく彼と同業……暗殺者の獣人だ。

「悪いが……死んでもらう」

刺客の一人が言い放ったその言葉に、死神は思わず笑った。

「ははは。あんたは優しいな。この仕事、向いてないぜ」

そう言うやいなや、死神は軽く息をつき……普通に歩き出す。

それにもかかわらず、刺客達は一步もその場から動かず……次の瞬間、胴体から真つ二つにされた。いつの間にか死神の手には、大きな鎌が握られている。

「この世はルールのないトーナメントみたいなもんだ。戦うつもりなら、即斬れよ。別に背後から不意打ちでも、恨みはしなかったんだがな……聞いちゃいねえか」

あまりにも手応えがなかった敵に舌打ちをしつつ、死神はその場を後にしたのだった。

決行当日。死神はよくある布の服に身を包んでいた。

離れた場所からでも、祭り特有のざわめきが聞こえてくる。

「……へえ。思ったよりもずっと規模がでっかい祭りじゃないか」

そこは山間にある、なんの変哲もない村のはずだったが――

死神の目に映った祭りの異常な盛り上がり方と尋常でない人の多さは、下手な城下町よりもずつ

と華やかに感じられた。

「……普通の村じゃないのか？ その割に警備の兵隊は少ないが……なんにしても武装していなければ、制圧するのは簡単か……」

ざっと見ても、不自然なほどに武装している者が少なかった。

普通なら魔獣なり賊なりを警戒していそうなものだが、不用心な村である。

死神にしてみれば、人が多いことも含め、仕事をするには最良の状況であった。

何をするにもやりやすい、と思わずほくそ笑む。

計画は至って単純。まずは村の中まで行商を装い潜入し、目標の娘を確認して確保する。

その後は適当な家に魔法で火をつけてから、ゆっくり帰路につくというもの。

山間の飛び地のような村だから、他の村からの増援を心配する必要もなく目撃者にさえ気をつけていれば魔獣の襲撃で片付けられる。

「……楽な仕事だ、本当に」

単独ゆえのシンプルな計画だが、この規模の村ならこれくらいでも十分だろう。

対象となる『歌姫』は生きたまま連れ出す必要があったが、小娘一人さうのに手間もかかるまいと死神はたかをくくっていた。

しかし――

柵に囲まれた村の入り口から侵入しようとした時、予想外の事態が起きた。

ピンクの服と鉢巻を付けた独創的な格好をした若い男が、死神を呼び止める。

「すんません。ちよつといいっすか？」

「……はい。何でしょうか？」

死神は若干、警戒を滲_{にじ}ませてそう尋ね返した。

ガタイのいいこの男、察するに村の力自慢というところだろう。

ニコニコと人当たりのよさそうな笑みを浮かべつつ、死神に話しかけてくる。

「今日はお祭りです、人が多いで入場制限をしているんすよ。馴染_{なじ}みの行商の方には前もって伝えてあるんすけど、手形か紹介状はありますか？ なければ村の外に宿泊所がありますんで、そこで一晩お願いします。すんません」

「手形か紹介状ですか……？」

「はい。祭りなどで多少は規制しないと。なにぶん小さな村ですんで。防犯上の問題もありますし……」

ピンクの男は随分と細かく決められた規則を、長々と説明し続ける。

こんなのは聞いてないぞ、あのデブと内心主人に毒づく死神。

祭りの入場制限なんて聞いたこともない。どんだけ人が集まると見込んでいるんだよ、と一言物申したかったが、彼には正規の方法で村に入る手段がない。

死神は笑みを浮かべつつ、受付の男との距離を少しずつ縮めていく。

「……ですが私もここまで来るのに相当苦労していますし、今夜の祭りも楽しみにしていたので、どうにかありませんか？」

「本当にすんません。規則なので」

「そうですか……なら——これでもくれてやるよ」

もう面倒くさい……この男を斬り殺して、さっさと村に入って娘をさらえばいい。

スパッとほとんど感触もなく、男の首と胴体は離ればなれになる……はずだったのだが。ガキン！ と想定以上に硬い何かが彼の鎌を止めている。

「……なあ！」

それは、男が無造作に防御した腕一本。

その硬質な感触は、男の皮膚が並の強度ではないことを告げていた。

「あー……そういう系の方っすか」

男の目がギョロリと死神に向けられる。その瞳は金色で瞳孔が縦に割れていた。

ゾクリと死神の肌が粟_{あわ}だつ。こんなのが、なんでただの山村で受付をやったんだ！ と内心悲鳴を上げつつ再度斬りつけようとした瞬間、人間の力では到底ありえない勢いで弾き飛ばされた。

「!? ……!!」

死神は地面で一回跳ねて、転がっていく。

そして暗転していく視界の端で、妙に光っている男の瞳を確認した。

「俺らのアイドルに手え出そうとかありえないんで……」

ピンクの男のそんな言葉が耳に入ると同時に、死神の意識は途切れた。

死神は気持ちの悪い感覚とともに、目を覚ました。

どうやら気絶していたらしく、体がギンギシときしむような感覚を覚える。

喉の渇き方やぼんやりと見える空の明るさからすると、そう時間は経っていないようだ。死神が目を閉じたまま周囲を探ると、ここが、祭り関係者の控室であろうことは分かった。

まだ生きているようだが……なぜだろうか？

あの状況で完全に気を失って、目を覚ませたことが奇跡としか思えない。

それほど、あの受付のなんだかよく分からない生き物と自分には隔絶した差が存在していた。魔族か、それとも他の何かだろうか……？ とにかく、一人で対峙するには手に余る存在だということとは間違いない。

死神は、聞き覚えのある声を耳にして体を強張らせた。

「さて、どうするっすかね……？ あ、タイチヨー！ お疲れ様っす！」

「うむ。ご苦労、警備員六号！ 人間の喋り方もずいぶん板についたな！」

どうやら、警備員六号とタイチヨーという者が会話をしているようだ。

警備員六号の声は、先ほど受付にいた男のものだった。

「そうっすよ！ お話をしたくて勉強しましたもん！ 変身術も様になってるっしょ？ でも、ライプに行く条件が『完全に化けられること』って結構しんどいっすよー！」

「はっはっは！ それなら修練を積んで百番までに入るんだな！ あの公式会員証に付与されている魔法を使えば、もっと楽して完璧に人間の姿に化けられるぞ？」

「えーそっちの方が厳しいっすよ……勘弁してください」

「それにしても六号？ お前の人間語の『そーす』はネットだろう？ あそこはあの人が意図的に変わった感じの言葉を流行らせようとしているから、変な言葉になってるぞ？」

「そうなんっすか？ でもこの喋り方、結構話しやすいんで気に入ってるんっすよ！」

「ふむ……まあいいか。もうすぐ、踊りの最終確認をするから見張りを誰かに代わってもらっておけよ？ ……ん？ なんだ？ こいつは？」

タイチヨーが死神を指差し、六号に確認する。

「あ、またなんか物騒な輩っすよ。とりあえず潰しときましたけど、見張りは強めの奴に代わってもらった方がいいかもしれないっす……処理めんどくさいんで、コレ食っちゃっていいですかね？」

「んー。それは別にかまわんが……お前、知らないのか？ 今日の収穫祭では、彼女の手作りパンプキンパイが振る舞われると聞いているぞ？」

「ホントっすか！ ちょっとそれ、スゲー食いたいんですけど!! だったら、こんなもん食ってる場合じゃねっすね！」

「うむ！ 七号など三日前から絶食中だそうぞ？ まあ数には限りがある！ 私も手加減するつもりはない！ だが……食いそびれた奴に何か食料を用意しておかんな。飢えたあいつらを放置するのはまずいだろうし」

「俺もタイチヨーといえども、こればかりは譲れねえっす！ ……そうだ！ せっかくだしこいつは非常食につて……アレ？」

おっかない話をいつまでも聞いていられず、隙をついて死神は逃げ出した。

「……なんにしても普通じゃない！ どうなってるやがる!!」

何だあの会話！ ここは魔界か！ と胸中で叫び、絶望的な力の差を実感させられた死神は、この村のあまりに異常な事態に困惑しきっていた。

少なくとも、あの受付は一見まったく人間と変わりなかった。

「……ここは慎重に行くべきだろう」

弱そうという意味ではターゲットの娘は理想的だが、さっきの奴らに見つからずに奪取出来るかどうか……そんなことを考えながら村の中を彷徨っていると、明るい一角が死神の目に入った。

そこには飲み食い出来る出店が立ち並んでおり、香ばしい匂いが漂ってくる。

「人も多いから、紛れるにはちょうどいいか」

今は派手な動きをするべきではないと考えた死神は、なるべく普通に見えるように乱れた呼吸を意識的に整えた。

そんな時、せわしなく出店で動き回っている小柄な影が死神の目に留まった。

やけに際（そば）とい黒の衣装を身につけた少女が、赤毛のツインテールを揺らしつつ楽しげに出店を物色している。

大きな帽子の下から見えるその顔は、美少女と言えるほど整っていた。

「あれが歌姫か……？ まあ、違ってもいいか。仮に人違いだったとしても、あのデブなら気づきやしないだろう」

こんな危険なところに長居は出来ないと、目的をさっさと達成する方向にシフトした死神は、その少女に狙いを定めて話しかけた。

「お嬢ちゃん……」

「ん？ なあに？」

「悪いけど……お兄さんとちょっと来てくれるかな？」

しゃがみこみ、少女の関心を引きつけた瞬間、死神は動いた。

掌に魔力を集めて、水の魔法で体の中をかき回し意識を奪う。打撃よりも確実に、長く意識を奪うことが出来る魔法を子供に使うのは、死神が少々慎重になりすぎていたから。

気がはやり、それ逃げると、死神は攻撃をしかけた瞬間から、自分が今から逃げる方へ意識を向けた。

「……ぐふ！」

だが次の瞬間、意識を持っていかれそうになったのは死神の方だった。

少女の意識を奪おうとしたはずなのに、強烈すぎる衝撃と眩暈が死神を襲う。

悶絶する死神に、少女はものすごく楽しげに話しかけてきた。

「えー！ なにこれ痴漢？ 私がかわゆいのは分かるけど、そんな手荒にしちゃイヤン」

ニヤつきながら、少女はクネクネと体を揺らす。

魔法をかけようとした死神の手を、少女がとつたところまでは見えた。

そこから、死神の魔法は無力化され、逆に同じ魔法で返されたらしい。

「……！」

彼が気を失わなかったのは、運がよかっただけだろう。

言葉も出せず動けずにいる死神の顔を、少女はしゃがんで覗き込んだ。

「キヒヒヒヒ。幼女が歌う祭りだと聞いて来てみたら、やっぱり俗世は物騒なもんだねえ。まあしょうがないさ……女が一番輝くのはこの年代だということが証明できたしね。責めやしないよ。でもさ、女に手荒な真似はただけだねえ……そういう悪い子はどうなるか分かるだろう？ 祭りの夜にや何かが混ざっているもんさね。みんな浮き足立って、一人や二人消えたって誰も気づきやしない。それが悪党なら尚のことさ。ふむふむ、魔力はそこそこ……でも面白いものを体に入れているねえ。いつでも呼び出せる鎌？ 鎌とはまたマニアックな武器だ。まあどうでもいいんだけど、それよりちょうど今、試したい薬があったんだ」

死神の秘密を一瞬で暴き立てた少女は、その化け物じみた本性を曝け出す。

「じゃあ……お兄ちゃん。ちよっと医者さんごっこに付き合ってくれる？」

少女はがっちりと死神の髪を掴む。そして少女とは思えないような笑みを浮かべて嗤ったのだ。

「……！」

死神の全身の細胞が悲鳴を上げる。

やられる！ このままでは死ぬよりも恐ろしい、人としての尊厳を踏みじられるようなことをされる！ そう本気で思った瞬間、死神はあらん限りの力で声を張り上げた。

「あ！ あんなところに歌姫が！」

わずかの間を置いて、死神と少女のいる辺りから動揺が広がっていく。

「なにー！ もう始まったのかいー！」

苦し紛れのイタズラのような手が驚くほど上手くいってしまった。

暗殺者として恥ずかしく情けない気分であったが、死神は悲鳴を上げる体に鞭打って手近な路地に飛び込む。

そこで息を潜めて隠れていると、少女の皮をかぶった何かのため息が聞こえてきた。

「ありゃ？ 結構、速いね。もったいないけど……まあいっか！ まだ見ていない屋台もあるし！ さすがタローの奴が選んだだけあって、珍しいものが揃い踏みだしねえ！」

嬉々として走っていく少女のような何かを、死神は肝を冷やしつつやりすごした。

「あ、あれは絶対に歌姫なんかじゃない……！ 魔女だ！ 魔女の類だ！」

あのまま、魂を引っこ抜かれてもおかしくなかった。

最早、この村から脱出するしかない！ そう判断したことがよかったのだろうか。

心が折れる一歩手前の死神に、運が回ってきたようだ。

死神の目に入ったのは、村の広場に設置されたやたらと豪勢なステージと、小さな小屋。

明かりがついているその小屋はどうやら楽屋のようだった。

「楽屋か、中にいるのはイベントの出演者だよな？ 人質候補なら……あそこにいるだろう。だが……まさか舞台役者までがヤバいなんてことはさすがに……ないよな？」

死神は人質をとって逃げることを決意する。

人質にする場合……出来れば女、子供ならなおよい。今となつては少し不安だが……これまでの経験に基づいた判断は間違っていないと信じて。

誰が舞台役者に武力を求めるのか？ ここまで遭遇してきたアレが特別だったのだと自分に言い聞かせて、死神は崩壊寸前の氣力を奮い立たせた。

死神は息を殺し、速やかに小屋に向かった。

小さな窓越しに部屋の中の様子を窺うと、そこには二人の人間の姿。

一人は白髪の背の高い男。もう一人は緑色の髪の女だった。

村の祭りに呼ばれた旅の一座というより、むしろ王都の劇場にでもいそうな、恐ろしく顔立ちが

整った役者であることに嫌な予感を覚え、一瞬、不安になったが……

『戦闘員じゃない』と思いたかった死神は、その不安をかき消した。

「……大丈夫だよな？ 大丈夫だろう」

二人は、大量の可愛らしい服を前に何か作業をしていた。

男の方は随分といい体をしていたが、舞台用に少し鍛えた程度の相手なら問題にならない。息を殺しつつ氣配を潜めて、死神は二人の様子を窺う。

「マオちゃん、大詰めだ！ 今日の失敗は許されないぞ！」

「クイーンさんも手を抜いたら承知しないわよ！」

「ふはははは！ 愚問だな！ 妾は常に全力全開だ！ ちよつとでも氣を抜けば、あつという間に置いて行くぞ！」

女と男は激しく言い争いつつ服の準備をしているらしい。

そして、死神が覗いてから数分後、ほぼ同時に作業を終えると椅子に座って一息ついた。

「ふう！ 歌姫のステージ衣装はすでに準備済み、問題は前座のステージだったがこれで後はモデルを待つばかり。更に細かい調整はまた後でだな」

「でもさすがクイーンさんよね、まさか村のお祭りにファッションショーをねじ込むなんて、その発想はなかったわ！」

「なに、この村の祭りの注目度は侮れないからな。それに、設備も充実している。情報発信にこれ

ほど適した村もあるまい。マオちゃんもよく協力してくれた！ 札を言うぞ！」

「こちらこそ充実した時間を過ごさせてもらっているわ。で？ 例の件はどうなの？」

「……手配済みだ。今回のファッションショーにはエルフのモデルが来る」

「本当に!? 凄いじゃない!」

「ふふん! だろう? もっと褒めてくれてよいのだぞ! 薔薇の君さんをようやく口説き落としてな。中々骨が折れたが、今日のステージがいっそう華やかになることは間違いない」

「盛り上がりつつくるわね!」

「いやいや、マオちゃんが無理して現地に来てくれたというのに、無様な舞台は晒せんさ……それにしても、よくここまで来られたなあ。大丈夫だったのか?」

心配そうに緑の女がそう尋ねると、白髪の男は視線をそらした。

「い、いやまあ……大手を振っては無理だったんだけど、問題ないようにしてきたから。アイテムがあるのよ、そういう……」

「そんなものをどこから手に入れたんだ?」

「タ、タローちゃんから……」

白髪の男の返答に、緑の女が苦笑いしながら応じる。

「あー……まあそうか。実は妾もなんだ」

「あ、そうなんだ。でも別件で、この村には一度、顔を出さなきゃとは思ってたから。ちょうどよ

かったわ」

「別件?」

「そうなの。うちの子達がこちらのお嬢さんに随分と熱を上げててね。ちよっと様子を見とかなきゃな」

「あー……アレか。今日のメインだからな。妾は好きだぞ? 歌もいい」

「いえね? 私も好きなのよ? 好きだけど……なに、あのピンクの一団。普段からあんな服で活動してるの?」

「アレは確かにスゴいな。恐ろしくピンク色だった」

「そうなのよ……人の趣味に文句は言いたくないけど。女の子を応援するにしても限度がない?」
「そー……だなあ。でも限度というなら、我々も人のことはなあ。会ったのか? 鎧の奴に」

「ええ、一応。ものすごくテンションが下がってたわ。いつの間にか頭なんか、生やしちゃって」

「頭くらい、許してやってもいいんじゃないか?」

なにやら頭を抱える白い髪の男に対して、緑の髪の女は実に微妙な苦笑いを浮かべる。

双方、気まずいのだろうか、目を合わせていない。

察するに二人は、どうやら支配階級らしく、比較的近い間柄のようだ。

それがなぜ、服の裁縫などしているのかは分からないが……戦闘員でないなら、それでいい。

死神は必要最低限の情報は得たと断定し、敗北するイメージを振り払うべく無駄な情報をシャッ

トアウトする。

「とにかく、私達は私達の役割に徹しましょう」

「そうだな。妖精にも歌は流行ってていな。ステージを手伝うことに、やぶさかではない」

「そうよね！やることはやらないと。私たちが主役のファッションショーは精々前座なんだし、ステージを盛り上げましょう！」

「その通りだ！とはいえ、メインのステージを食ってしまうポテンシャルは十分に秘めていると自負しているかなあ！いやそのメインのステージすら、我らのセンスがキラリと光っている！」

「その通りよ！このステージを足がかりに、ブランドの知名度を上げていくわよ！魔族にも十分アピールできるはず！」

「……魔族にもあの歌姫は定着してるんだな、やっぱり」

「……ええまあ。それなりに。せっかくだから魔族でも何かやろうかしら？手始めにラミアちゃんあたりを送り込んでみる？」

「やめたほうがいいんじゃないか？側近がまた一人ピンクに染まるぞ？」

「……そうね。やめておきましょうか」

一方の死神は覚悟を決めていた。大事なところを聞き逃していたとも気づかずに。

そして、彼は最善の手を考える。

最初に出会った受付の化け物は、歌姫を随分と大切にしていた。

最悪、仕事を放棄するとしても人質の身柄さえおさえておけば、逃げることは可能だろう。そう、今の死神が必要とするものは、あの化け物どもに見つかった時に確実に身を守る手段だった。

ひどい悪党だなと我がことながら思いつつ、死神は楽屋の扉をそっと開けて、標的を確認。

まだ人が少ない今のうちに、この二人を無力化してしまわねばならない。

小屋に潜み、人質候補を待ち構えるにしてもあの二人は邪魔だ。

まずは女の方を盾にする！

死神は緑の女に狙いを定めると部屋の中に体を滑り込ませる。

そして、鎌の柄を女のみぞおち辺りに叩き込もうとした……が、謎の光の玉に弾かれた。いつもは命中する武器が、今日に限って全く当たらない。

死神のプライドはすでにボロボロだったが、ここで思考停止するわけにはいかなかった。こうなったら男の方を！

自慢のスピードを活かして緑の女から離れ、白髪の男に迫る死神。

刹那、男の額に輝く真つ赤な第三の瞳に見据えられ、ソクリと寒気が走り抜けた。

死神はこいつらに挑むことがいかに無謀であるかを、その一睨みで理解してしまった。

「……！こいつも人間じゃないのかよ！」

もう何も信用出来ない、そう思った次の瞬間、死神の体は何かに掴まれて宙に浮いていた。

こうして攻防は、あっさりと終了。この間わずか数秒の出来事であった。

「……なんだこれ」

もはや、死神には叫ぶ元氣すらない。

「あんたこそ……なんのつもり？ 衣装が汚れたらどうしてくれるわけ？」

「まったくだ……何者だ貴様？」

男と女、それぞれの声が聞こえてくる。

二人の放つ常軌を逸したブレッシャーを肌で感じつつ、顔だけをその声の方に向ける。

そこにはただ立っているだけで『格』が違ふことを思い知らされる、絶望的な殺気を放つものがある。

自身を拘束している黒い影や、魔法の光の玉がぐるぐる回っていることすらどうでもよくなる、圧倒的な恐怖の塊が立っていた。何が怖いって、存在そのものが怖い。

死神は体の震えが止まらない。だが、助けは思わぬところから入る。

「……やめよう。マオちゃん。今日は祭りだ。こんなことで盛り下げたくない」

緑の女がそう言つと、白い髪の子はまるで何事もなかったかのように殺気を消し、死神をあつさり解放した。

「それもそうね。今日は血なまぐさいのはナシでいきましょう。ここで、衣装を汚しちゃうのもアレだしね」

解放された安心感と依然として存在する脅威の前に、突き動かされるように死神は走り出す。

無様に逃げ出した後ろで、化け物どもがあつけらかと話している。

「それにしても、警備は何をしてるんだか。こういう輩が入ってこれないようにしないとダメじゃない？」

「同感だ。後でタローに文句を言つてやろう」

「あ、ひょっとして警備の担当、うちの子じゃない？ もっとしっかりやらなきゃダメじゃないねえ」

「竜も噛んでいるだろう？ あいつら大雑把だからなあ」

「困ったものねえ」

「本当になあ」

「ま、ほっときましょう」

「……そうだな。たかが人間一人。何が出来るとも思えん」

死神は逃げた。ただただ、逃げた。

どんな修羅場をくぐり抜けた時よりも、生きた心地がしない。

まるで、刺激してはならない生き物の根源的な何かをズタズタにされたような思いを抱く。

「はあ……はあ……はあ……はあ……ど、どうなってんだこの村は！」

死神は、この村から逃げる以外の選択肢が浮かばないことに、腹の底から体を焼き尽くされそうな苛立ちを覚える。情けない……自分自身をそんな風に思う日が来るとは、ついぞ思わなかった。

めちやくちやに走って辿り着いたそこは……広場だった。

なんとか逃げ切れたとほっと出来たのも束の間、死神は息を呑む。

「……」

一人のオヤジが草原に立っていた。大きく出た腹が邪魔そうで、どう見ても兵士には見えない。念のため、注意深くその動きを観察してみたが、特別な何かを感じることはなかった。

「だが……」

さすがに死神も学んでいた。この村では、見かけなど全く意味がないことを。

警戒心を隠さずに身構える死神に、オヤジが声をかける。

「なんだね君は……お客さんかね？」

「……あんたにはここで死んでもらう」

その無茶苦茶な言葉は、単なる破れかぶれだった。

そんな死神の言葉を受け、オヤジはスツと目を細めて自然体に構える。

……このオヤジも、さっきの奴らみたいに常軌を逸した存在だとしても？

あまりにも不自然なオヤジの対応を受けて、死神が問いかける。

「あんたは……人間か？」

「ああ、人だよ。人以外の何者でもない」

「なら……あんたの命はここで絶つ」

以前の死神なら、こんな台詞を言うことはなかっただろう。

これは自身の何かを保つためのどうしようもない言葉だった。

腹の底にたまった敗北感を払拭するための、己を守るための戦いの合図だった。

しかし、死神の殺気が込もった視線を、オヤジはそよ風のごとく受け流す。

「やめておけと言っても無駄なのだろうな……ならば相手をしよう。それが、我らの運命だというのなら……致し方ない」

「何を言ってるやがる！ わけが分からねえんだよ！ 何が運命だ！ ここで一人、人間が殺し屋に殺されるってだけだ！」

死神は思わず叫んでいた。

目の前のオヤジは素人だ。そう、自身の勘が囁いている。

ためらうことなど、何一つしてないはず。だが、死神は動けずにいた。

先ほどまでの出来事によって、体が委縮してしまっているのだろう。

とはいえ戦場では動かない方が負けることを、死神は知っていた。

だからこそ、体を動かす。いつものように、獲物を狩り殺すために。

死神は男に飛びかかるとともに鎌を出現させ、地面すれすれに刃を走らせる。敵が反応出来ないのは、間違いない。

俺の鎌は最速だ！

鎌がオヤジに到達する寸前、死神は勝利を確信した——のだが、刃は空を斬る。

「……！」

死神はもう泣きそうだった。

がむしやらの鎌を振り回すが、当たらない。すり抜けるようにオヤジの身体がぶれるのである。

「くそお！　なんで当たらねえ！」

涙で前が見えなくなり、無様にその場に転がる死神。

オヤジは不思議な構えを取ったまま目を閉じ、口を開く。

「虚しい力よ……まるで怯える野獣だ。そんな力では、私に触れることさえ出来ないだろう」

そしてゆっくりと瞼を開くと、静かに声を発する。

「愛なき力に強さなどない！」

「……！」

意味不明である。だがその言葉は妙に力強く、そして自信満々であった。

「引く気はないか？　小僧……」

今更引けるわけもない。彼は今、他人の命を絶つ、あるいは自分の命を危険に晒すことでしか、

自我を保つことが出来ないのだから。

これが暗殺者『死神』と呼ばれた男の最後の矜持だった。

「……引けないね。そう言われちゃったら……それこそ引くわけにはいかねえよ。もう仕事なんだとは言わねえ。ここからは俺の戦士としてのあがきだ。最後に聞かせてくれよ？　……あんたはいつたい何者なんだ？」

死神はひどい絶望感にとらわれていた。

そんな死神にオヤジは……ただ深い、とても深い笑みを見せて名乗った。

「ただのしがない村の肉屋よ……」

「……肉屋ってなんだ！」

「だがその肉屋にお前は敗れる……」

「……ぐう！」

何か来る！　とてつもなくヤバい何かが迫るという確信を死神は抱いた。

死神は最後の氣力を振り絞って声を張り上げる。

「見せてやるよ！　俺の最速を！」

「ならばその信念！　我が奥義にて応えよう！」

オヤジの周囲に風が集まり、いつの間にかその手には二本の巨大な肉切り包丁が握られ——

「断罪の肉切り包丁X!!」

——オヤジが武器を振り降ろすと二筋の閃光が放たれた。死神の目の前の地面が砕けてゆく。衝撃に巻き込まれ鎌が折れるとともに、死神は心の折れる音を聞いた気がした。

「……うわああああああ!!」

死神の身を包む服が弾け飛ぶ。

そして悲鳴とともに、死神は光の中に消えていった。



そこから今に至るまで、記憶はない。

這って逃げたような気もするし、誰かに運ばれたような気もする。

ただ気づいた時には、全裸で森の中にいた。

あまりにも静かなその場所は、虫の鳴く音しか聞こえてこない。

いや……遠くから美しい少女の歌声が微かに聞こえてきた気がした。

空に輝く星を見ると、頬にスツと一筋の涙が流れ……死神はポツリと呟く。

「……転職しよう」

ある村の収穫祭から数日後のこと。

その祭りの歌姫をさらえと命じた屋敷の主人に復讐を果たした暗殺者がいたらしいが、その話は
闇に葬られたようである。

2

「……なんと」

一匹の竜——スケさんはその美しさを目の当たりにして言葉を失った。

天女が空から舞い降りた。羽を象った武骨な鎧で身を固めながらも、その優雅さは失っていない。
纏った羽衣以上に、透き通るように美しい肌は、触れることさえためらう。結わえられた艶やかな
白銀の髪は、森に降り注ぐ木漏れ日の如く輝き、一瞬にして目を奪われた。

よく見ると、戦いによるものなのか傷だらけだった。それでもその美しさは少しも失われること
なく、そんな彼女の姿にスケさんはただただ息を呑む。

天女は射貫くような視線で、しばらくスケさんを見据えた後、跪き、懇願する。

「竜よ……どうかこの私に、我が一族に伝わる兜をお返しいただきたいのです」

「……」

それは竜の谷の宝物の一つである、天女の兜だった。

「私にはその兜がどうしても必要なのです。……どうか!」

スケさんの本能が囁く。いいよと言ってしまえ、と。

兜なんぞ持っていたって、どうせかぶることなんてないのだ。

その兜にしたって、どこかの汚い部屋で埃をかぶっているに違いない。

しかし、スケさんはふと、竜族の長老である父の言葉を思い出す。

『竜は威厳も大事だぞ? 舐められないように振る舞え』

……それはそうだ。父や私が威厳を保つことで、一族全体に規律が生まれるというもの。

いくらなんでも、この場で即断即決して返しちゃうなんてのはあまりにも……

などと考えている最中にスケさんは答えていた。

「どうぞ、どうぞ! 持っていっちゃってください! なんならお包みしましょうか?」

「ほ、本当ですか!」

「……ええ」

しまった、勝手に口が動いてしまった。

己の愚かさを悔やみつつも、スケさんは自分がものすごく浮かれていることを自覚する。

「勿論、当然のことではありませんか。えーと……あ、貴女は何者です?」

高鳴る鼓動を感じつつ、押し寄せる感情の波をなんとか整理した上で、スケさんは天女に尋ねたが、もう何がなんだかわからない。とにかく気持ちを伝えるべく、求婚でもするかと気合を入れ

直す。

すると、天女は希望に満ち溢れた美しい声でこう告げた。

「私はワルキューレと呼ばれる者の一人。我が最愛の人のため、どうか願いを聞き届けていただけたらと……」

「……」

スケさんの今回の恋は、口に出す暇さえなく、あっさりと散ったのだった。



「……というわけですね。ちよっぴり手を貸していただけたらいいなーっと」

俺、紅野太郎は自分では魔法使いっぽいと信じている黒マントで正装してから、客を迎え入れた。しかし肝心の客の様子がおかしいので、トレードマークの毛を頭の上で『?』と動かした。

俺の目の前では今、若干くたびれ気味なスケさんが、手を合わせている。

人間形態のスケさんはいつも生命力に満ち溢れているのだが、今日に限っては珍しく声に張りがない。何より、手を貸してくれとは中々珍しいことを言うものだ。

「え? ちよっと待って……手を貸すって、何がどういうわけか、さっぱり分からないよ?」

「そうですか?」

「いや……まあ嫌な予感はあるけども。後スケさん、顔色悪くね？」

「そんなことはないですとも。むしろ天女と出会った時と同じくらいの晴れやかな気持ちです。大丈夫です」

「……天女ねえ」

俺はちらりと、今回の出来事の原因を盗み見る。

——突然、覇氣のないスケさんが、武装したスゲー美女を連れてやってきた。

彼女は結構な怪我を負っていたので、今は魔法で治療し横になってもらっている。

その美女、なんとワルキューレという、神の使いらしい。

呼び方はスケさんのネーミングをそのまま採用して、天女さんである。

ちなみに神様といっても、紅野家の爺さんではない。

「で？ ワルキューレってのは、どういう人達なのさ」

俺がそう問かけると、スケさんは答えた。

「ああ、神族っていう呼び方が最も一般的ですかね。精霊って知ってます？」

「ああ。目に見えない火とか水とかに棲んでいる生物だということまでは、知ってる」

「神族とは自意識を獲得して、より強力になった精霊だと言われていますね。まさに意志をもった自然みたいなものです。ワルキューレとはそんな精霊が作り出した眷族といった感じですか」

ついに神族ときたか……まあ、神と名乗っても、誰からも文句が出ないような方々がいることは

素直に驚きだった。

スケさんの話によれば、天女さんは自分の恋人のために、竜の谷に殴りこんで来たのだという。

俺としては、何だか面倒くさそうで勘弁して欲しい話ではあった。

だがリビングで唐突に語られたスケさんの熱い恋愛話、お茶の間には大層受けたようだ。

ピクシーのトンボと、蛙姿の魔法使いカワズさんはお茶請けのせんべいをかじりながら、興味津々の様子。さらには、たまたま遊びに来ていた相変わらずセーラー服っぽいものを身に纏っているセーラー戦士こと、天宮マ加里まで気にしない風を装いつつ、チラチラとこちらを見ている。

こんな感じでギャラリーはとも面白そうにしているが、話に加わるつもりはないようだ。

それにしてもよく分からないのが、スケさんが天女さんの恋の揉め事？ を相談しに来たのが、俺だということだろう。どういふつもりなのだろうか？ この竜？

なんというか……俺を太郎さんだと分かっている相談してきたのか？

オタク受ける女の子のコスチュームとかならともかく、結婚目前のリア充のサポート方法など知るわけがないだろう。そう思いつつ、改めてスケさんに尋ねる。

「で？ 俺に一体どうしろと？」

本気で疑問に思っているみると、スケさんはふいっと視線をそらして言葉を返す。

「いえ……どう、ということもないんですが……」

「……チヨイこつちきてみ？」

立ち読みサンプル
はここまで



「……？」

「……まず状況を整理しよう。彼女はワルキューレっていう神族である？」

「ええまあ」

「そんな彼女には人間の彼氏がいる。それで、その人間の彼氏さんは、神族の偉い人に捕まった。そこで、彼氏を助け出そうとした天女さんは、ある条件を出されてしまった。それをクリアすれば偉い人から『婚約』を認めてもらえる、と。だけど、その条件が宝物の兜を取り返してくることだった。ここまではOK？」

俺が事前情報を整理して尋ねると、スケさんはこくりと頷く。

「……はい。どうやら彼女の一族の誰かが過去、竜に挑戦して返り討ちにあったようでして。兜は探したらありました」

「なるほど。これでその彼氏は、晴れて『婚約者』になれるわけだ」

スケさんが気にしていそうなところをそれとなく強調してみると、ピクツと反応があった。

万全を期すため、もう少しだけ揺さぶってみるとしよう。

「でも、俺に出来ることってたくない？ 条件は整ってるじゃん？ さっさとその兜を渡して彼氏さんのところに行かせてあげたら、解決するんじゃない？」

「……ガフツ」

「ええ！ ス、スケさんんん!?」